

II. 舞台技術に関わるスタッフ

1. 舞台技術に関わるスタッフ

舞台芸術の作品創造には様々な人材が関わる。演劇を例にとると、発注者もしくは企画者の意図のもと、プロデューサーが金銭面を含む舞台作品創造の枠組みを構築する。作品に必要な脚本が準備され、演出家、俳優、照明、音響、美術、衣裳、メイクなどの専門家が集まり、それぞれの分野のプランが練られ、具体的なデザインが作られていく。公演を行う劇場に入ると、個々の領域のプランとデザインが大道具や舞台照明、舞台衣裳などとして具現化される。舞台監督の交通整理のもと、リハーサル、仕込み、舞台稽古などを通じて、個々の要素を詰め、舞台作品を一つの形に調和させていきながら、初日を迎える。

ここで舞台創造のプランやデザインを直接担当する職能、具体的には演出家、舞台美術家、照明家、音響家、衣裳デザイナーなどは“アーティスト”として位置付けられるのに対して、舞台創造を技術的な側面から支える専門家として、照明、音響、舞台機構操作などの“舞台技術者”がいる。特に劇場の舞台製作、進行、運営では、事前のプランやデザインに基づいて仕込みを行い、様々な調整や工夫を行いながら作品の意図を具体的な表現として形にしていく。その他にも重要な役割として舞台設備（機構、照明、音響等）の管理運用、操作を行う舞台技術者の存在がある。舞台設備面だけではない劇場の特性、特徴を把握し、床設備や吊物設備の管理、運用、操作など劇場の利用に関する技術的指導を行う。また、公演終了時には仕込んだ舞台セットや舞台設備のバラシと舞台設備の点検を行うことも重要な役割となる。

以上のような様々な職域のスタッフの技術に支えられた表現が出演者など舞台上の表現者と一体となって作品が成立する。劇場空間は素晴らしい舞台の創造を実現する場であるが、一方では様々な危険と隣合わせの空間であるとも言える。安全面に対する最大限の配慮のもと、作品創造のために舞台技術者としての技を投入していくことが、素晴らしい作品づくりにつながっていくと言える。

2. 個々の職能と役割

ここでは、本調査研究の対象である、照明、音響、舞台機構について、また、大道具及び舞台監督についてもその職能と役割を見ていく。

(1) 照明

舞台照明に関わる職能は大きく舞台照明のプランやデザインを担当する「照明プランナー(デザイナー)」と照明プランナーの指示に従い舞台照明の仕込みや上演中のオペレーションを行う舞台照明技術者である「チーフオペレーター」あるいは「オペレーター」に大別される。

1) 照明プランナー

舞台照明に関わる職能の中で最も重要な位置にある。演出家の意図を最大限に汲み取り、照明家

の感性、美意識、技術を源にして照明という光のパレットを使い、作品を芸術の域まで高め舞台創造に参加する。光のマエストロ、光の魔術師、舞台の最終ランナーのように称されるプランナーもあり、公演の照明プランの出来、不出来の評価を一身に受ける立場にある。照明に限ったことではないが、プランナーとしての職能に必要な素養として、演出論、演技論、文章解釈能力、美的センス、音楽的能力、光学論、色彩感覚、電気工学、都市工学、劇場工学、外国語など実に多彩なものが求められる。

プランナーは、劇場に入る前には、演出家、美術家との打ち合わせ、稽古に参加し、キューシート、小別け、総合図面の作成を行い、チーフオペレーターにプランの説明、指示を行う。劇場に入ると、サス合わせ、明かり合わせ、テクニカルリハーサル、舞台稽古、ゲネプロ等に立ち会い、イメージのレベルであったプランを実際の舞台において実現する。

照明プランナーになるには、まず、プランナーに師事することからスタートし、仕込み、本番、バラシなどの一連の流れと、ステージ、フォロー、調光、チーフなど舞台照明技術者としての経験と信用を十分に積んでから初めて、本当に小さな公演のプランの依頼が来るということになる。下積みで5年から10年かかるので、20才前後でこの業界に入ると最初のプランができるのは30才前後になる。ほとんどの場合、現場での実務経験を通して教育・育成が行われるのが一般的で、そのような実務経験を経ないでいきなりプランナーになるということはずまない。

2) チーフオペレーター

舞台照明に関わる職能の中では、プランナーに次ぐ位置づけで、プランナーの意図を理解し、手足となって作品創造を助ける。端的にその役割を表現すると、明かりの再現と安全作業の徹底である。

公演期間中はプランを正確に再現し、照明スタッフの健康管理、他の職域のスタッフとのコミュニケーションをはかって公演を成功させる役割を担う。

劇場に入る前には、プランナーと図面打ち合わせを行い、その作品の照明プランを把握し、必要となる人員の手配と配置、諸連絡を担当する。また、舞台監督、制作担当者との連絡を取り、劇場での作業の段取り手順を確認し、劇場側とプラン通りの仕込みができるのかを確認し、調整する。また、不足機材の確保と手配、演出効果のための資材(色、ネタ)の準備、搬入車両の手配などをトータルに把握、調整し、オペレーターに対して指示を行う。

劇場に入り、仕込みの段階になると、器具や色、ネタ、回路取りなどがプラン通りに行われているかのチェックや、舞台美術家、舞台監督、照明プランナーの指示を受けて吊物設備などの高さ(タッパ)を決めること、また、光の大きさ、色、ネタなどを照明プランナーの指示通りに合わせる。これらの細かな作業の確認に加え、作業全体が安全に行われているかについて監督する役割も担う。特に、吊り込んだ器具の落下、発熱量の多いスポット照明器具などからの発火、高所作業の事故防止への配慮も重要な役割の一つである。

一通り仕込みが終わると、明かり合わせの作業に入る。調光操作室に入り、プランナーの指示のもと、舞台照明器具1台ずつの明るさを決め、キュー(きっかけ)ナンバー、変化時間等をコンピューターに入力する。マニュアル操作の場合は手書きでデータメモをメモする。最近の作品ではキューの数が300シーンを超えるものもあり、ムーヴィングライトを大量に使用したり、舞台機構、音響、映像機器と連動させるケースもある。

●テクニカルリハーサル

音響、舞台機構とキューナンバーで管理した明かりを実際の進行の通りに合わせる。出演者や歌手などが入るまえの技術的なチェック及び問題の解決をはかる。ここで、プランナーからの修正指示などを受け、調整を行う。

●舞台稽古

キューナンバーの追加、カット、変更などを行うことに伴い、変化時間、明るさ、器具などの変更や追加が行われ、いよいよ本番を迎えることとなる。本番に向けては、器具の球切れ、あたりの確認、色とび、ネタの破損等のチェックは欠かせない。

●移動公演

公演地毎に劇場設備が変わるが、どのような環境でもプランナーの意図を再現することが求められる。いわばプランナーの代行の役割も負う。しかし、変更やカット等のマイナーチェンジは許されても、新しい明かりをつくる権限はない。

3) オペレーター

チーフオペレーターに次ぐポジションで、プランナーとの事前の打ち合わせやキューシート、図面に欠かれているプランナーの意図を理解し、明かり合わせや舞台稽古の中で指示された作業を実際に行って、変更、修正、確認をしながらプランナーの考えている表現を実現する。本番中はチーフオペレーターを現場での命令系統の頂点として、決められた手順を確実に再現する。劇場条件、演目、公演形態、制作予算、プランナーの指示により、配置される箇所は様々に異なる。

仕事の内容は、調光室での補助（くみとり、くみてと呼ばれる）、ムービングライト操作、フォーロースポット操作、舞台周りの作業、最近では自動化が進んでいるが、ネタ替え、色替えなどの作業も行う。また、映像、特殊効果などとの連携も必要になってくる。

本番におけるこれらの作業を行う人員に対して、仕込み・バラシのみを行う人員を仕込み・バラシ要員と呼ぶ。

4) 劇場照明技術者

劇場の特性や機器の状態を把握し、外部からのニーズに対応する役割を担う。利用者のニーズに応え、劇場の照明関連機器、システム等を最大限に活用するか、単に館のルールや慣習に従って規制のみをするかで、同じ管理といっても全く異なるものになる。

(2) 音 響

舞台音響家とは、劇場空間に音を響かせ、観る人々の聴覚を刺激してより大きな感動を与える仕事に携わる者であり、概ね、音響デザイナー（プランナー）、チーフオペレーター、サブオペレーター、ステージオペレーター、システムデザイナー（システムチューナ）に分けられる。

音響スタッフの雇用関係は、音響専門会社の社員（劇場派遣含む）、公共、民間劇場の社員、フリーランス、地域の電気屋のいずれかである。業務形態は劇場派遣と劇場の社員以外は1カ所に留まらず全国各地で仕事をしている。

1) 音響デザイナー

聴覚の世界を一手に引き受け、舞台上のすべての音を統括するのが音響デザイナーである。演出家が意図するイメージを「音」で表現するために、「プラン表」や「仕込み図」などを作成し「音作り」に入る。プランニングは戯曲を読んだ時から初日まで続くが、音作りや仕込み図の作成は舞台稽古前に終わらせておく。「音作り」とは、音楽や効果音などの音素材の収集、分析、選択、編集をする作業であり、作者が言わんとする物語・演出家が表現しようとする世界・方向性などを充分にくみ取ったプランを作成するための幅広い知識と音響技術が必要となる。また日進月歩の音響機器から最適な音響機材を選択し、図面化したものを「仕込み図」といい、音響プランを具現化するために必要な音響チームを構成し、打合せや稽古場での音出しを通して、演出家の意図や音響プランを理解させることも重要な仕事である。

2) チーフオペレーター

音響デザイナーがプランしたイメージを舞台上で「音」として表現する仕事で、デザインの良し悪し、作品の出来不出来をも左右する重要なポストと言える。仕込み・舞台稽古ではデザイナーの「意図」をはっきりと認識・イメージ化した上で、デザイナーの望む表現をより良い方向に導く手助けをすると同時に安全作業の徹底が大切な仕事となる。また、公演期間中は初日までに築き上げた音響プランの維持が重要な仕事になるため、音響スタッフの要となり、その作品のカンパニーとチームワークの取れる人間性が求められる。

3) サブオペレーターとステージオペレーター

舞台音響では、公演内容により必要となるチーフオペレーターに次ぐポジションである。

●演劇の例：

チーフが効果音と音楽の再生を担当した場合、サブオペレーターが台詞や歌、生演奏の音楽のミキシングと拡声を行う。

●ミュージカルの例：

チーフがワイヤレスマイクのミキシングを担当する場合、サブオペレーターが音楽のミキシングと効果音を担当する。

●歌謡ショーなどのPA：

チーフが客席へのミキシングを担当し、ステージオペレーターが歌手や演奏家に聞かせるモニターのミキシングを行うため、ステージオペレーターはミキシング技術以外に、歌手や演奏家とのコミュニケーションが重要な仕事になる。

このように、音響プランの意図を理解し、デザイナーとチーフオペレーターの指示に従い仕事をするのは当然であるが、舞台音響の場合、チーフ・サブの担当する内容が異なることが多く、チーフオペレーターに準じる素養を持ち合わせていることが望ましい。また、ミュージカルなど20本～30本のワイヤレスマイクを使用する作品では、個々の俳優に合わせたマイクヘッドの養生と受け渡しや監視が必要なため、ワイヤレス・ケアという選任の係が必要になる。その他、ステージ周りでのマイクアレンジやスピーカーの仕込み・バラシなどの作業も行う

4) システムデザイナー（システムチューナ）

音響デザイナーがデザインした音響空間を、音響機材などを使用して具体的なシステムとして構築する。主に、プランニングに基づき仮設したスピーカーを、アナライザーなどの測定器とイコライザーやディレイなどの音響機器を使用して調整する仕事。（システムチューナという名称は日本音響家協会が使用している）音響工学に精通していなければならない。

5) 劇場音響技術者

劇場に常駐もしくは、常駐せずとも専任で外部の利用者に対して対応する役割として、劇場音響技術者がいる。劇場の音響機器を保守・管理し、舞台使用時の安全管理を行う。また、音響デザイナーが作成した図面をもとに、システムの劇場で対応できるかどうかを判断し、「最高の効果」を得られるようアドバイスする。規制ばかりを前面に出さず、デザイナーやチーフオペレーターの意図を理解し、音響技術者として可能なかぎり支援することが望ましい。劇場の運営形態によっては、音響デザイナーやオペレーターの仕事を行う場合もある。

(3) 舞台機構操作

舞台機構操作に関わる舞台技術者が担う役割は、床設備、吊物設備など舞台機構に関する操作とそれに付随する安全管理、大道具などの仮設（仕込み、撤去など）に関する指導・助言、そして舞台機構設備そのものの日常的な管理と点検を行うことである。基本的には舞台機構設備内容に関わらず、舞台機構設備の操作に関わる知識と経験、そして技術を十分に持ち合わせた舞台技術者を常駐させる必要がある。ただし、現状として舞台機構操作のみを専門とする専従の舞台技術者を配置することが難しく、舞台照明や舞台音響等の業務を兼務することも少なくない。その場合でも、舞台機構を操作する舞台技術者は、前述のとおり舞台機構設備の操作に関わる知識と経験、そして十分な技術を持つ舞台技術者に限られる必要がある。またこれまで貸館を主たる事業としていた劇場で、吊物設備の多くが手動による駆動システムとなっている劇場では、操作の範囲を明らかにした上で、外部の利用者に一部舞台機構設備の操作を行うことを認める場合もある。この場合でも、その舞台機構設備を操作する舞台技術者には、同様の知識、経験そして技能が求められる。

舞台機構操作に関わる舞台技術者に求められる技能としては、迫や回り舞台等の床設備、吊物バトンなどの積載荷重の制限や、日常的な舞台機構の点検、操作の際の安全確認などへの配慮が絶えず必要であり、舞台機構設備の安全管理を怠った場合や誤った操作が重大な人身事故に直結する原因になることもある。

舞台機構操作は本番だけではなく、仕込み、撤去（バラシ）の際の般出入、リハーサルなどの際にも行われる。例えそれまで多くの経験や技能を有する舞台技術スタッフがついた公演でも、公演を行う劇場の利用が初めての場合には必ずしも舞台機構設備の特性や危険性について熟知しているとはいえない。このような場合には、利用者と舞台機構操作スタッフの双方が綿密な打ち合わせを行い、指示系統や安全確認の方法について共通の認識と理解を図る必要がある。特に安全面への配慮は、念入りな確認や調整を図った上で操作を行う必要がある。

舞台機構は、個々の劇場によってその仕様が全く異なる。同じ劇場で稽古やリハーサルから公演までをその劇場で行えるかによって、舞台機構設備を演出的に使用できる場合とそうでない場合が考えられる。演出的に使用できる場合には、単なる舞台機構操作を行うということだけではなく、その劇場の舞台機構設備の特長をいかに生かしていくかということから舞台機構操作の専門家として舞台作品の創造に深く参画することになる。

(4) 大道具

舞台装置は演出家や各デザイナーとの協議を経て、舞台美術家(舞台デザイナーと呼称されることもある)によってビジュアル化され、大道具製作者(我が国の場合、多くは“大道具製作会社”が担う)によって舞台装置として製作をされる。このように工場や大道具製作会社で製作された舞台装置を劇場に搬入し、舞台上で使用できるように組み立てて行くことと本番中の転換、そして公演が終了してからの撤去(バラシ)・搬出までの作業を担う職能を大道具(あるいは大道具方)と称する。

舞台装置、セットでは、金属や木、布、スチロールなどをはじめとする様々な素材を立体的に構成することや幕に描くなどすることにより視覚的な演出効果を担うものもある。もちろん舞台美術としての造形や描写の技量が演出の意図を十分に反映していることが基本になるが、その仕込みや操作、ましてやそのもの自体の強度といった安全性への配慮を欠くことができない。舞台装置自体の強度ということも無論あるが、大道具に関わるスタッフは、本番中の舞台転換など、必ずしも十分な明るさ、時間、スペースなどが確保できない中での作業を行うことも求められる。また、本番前の仕込みにおいてもあまり時間的な余裕がない状況で作業を行うことも多く、素材に関する知識はもちろん、素材自体の強度や仮設作業の安全性についての知識や経験ということも求められる職能である。

(5) 舞台監督

舞台監督は舞台技術者という枠組みだけで捉えきれない職域ではない。しかし、舞台技術に関する総合的な知識が求められ、舞台技術者との密接な関わりがある。

舞台監督とは、舞台上における多種多様な実務を一本化し、演出意図を円滑、かつ的確に具現化する役割を担う、いわば、舞台に関する総合調整役である。舞台監督には、舞台づくりへの幅広い知識、作品への理解の深さだけではなく、安全への配慮、予算の把握と執行、各分野の意見をまとめそのバランスを調整できる能力まで様々なスキルが求められる。また、このような技術的かつ実務的な側面に加え、出演者も含めた、舞台に関わる様々な職域の人間関係とコミュニケーションを円滑に保ち、個々の創造力と技術力を最大限に発揮させる役割も担う。

舞台監督の仕事は多岐にわたるが、大きくは制作に関わること、制作と舞台の進行に関わること、舞台全体の技術に関わることに分けられる。制作の段階においては、音響、照明、美術等各分野のプランニングの調整を行い、稽古から上演に至るまでの間に必要なモノの調達、製作スケジュールや進行管理を行う。また、上演段階においては、搬入から仕込み、上演、退館にいたるまでのタイムスケジュール及び進行の管理を行い、また上演時には各きっかけの指示、

舞台進行の管理を行う。この制作、進行の過程において、演出意図に基づいた舞台機構、音響、照明、美術等の各々の技術的な調整をも行う。これらは相互にリンクし、かつ同時に進められる。

欧米においては、プロダクションマネージャーが上演に至るまでの制作を統括し、上演時の進行管理はステージマネージャー、また、舞台における技術面の統括はテクニカルディレクターが担うなど、職能が細分化されているケースが多いが、日本においては、その全てが舞台監督の仕事に含まれている。

●舞台監督に関わる職務分掌の種類

| 呼 称 | 職 務・所属等 |
|---------------|---|
| ステージマネージャー | 欧米ではキュー（きっかけ）を出すのが主な仕事 日本ではプロダクションマネージャーに近い職務、大道具の棟梁に近い職務を担う場合など一律には定義できない |
| プロダクションマネージャー | 舞台装置、照明、音響、衣裳、かつら、小道具等、俳優以外の、舞台技術全体の予算編成、決定された予算の執行、スケジュールの立案、管理、舞台技術の範疇に属する様々な仕事の調整 |
| テクニカルディレクター | 舞台制作において、そこに関わる様々な分野の技術スタッフを指揮・監督する。技術全般に渡る知識が必要。プランナー（デザイナー）が立てた演出プランを最善の形で実現するため、技術部門の統括者として補佐する。 |

参考：舞台芸術に関わる人材の現状と養成の問題 2000. 3 （社）日本芸能実演家団体協議会

劇団や芸術団体に所属する人と、フリーで活動する人に分かれる。組織に所属する場合、たとえば演劇においては、劇団の演出部やスタッフ会社に所属したり、クラシック音楽であれば、音楽事務所にステージマネージャーとして、また、伝統芸能では興行会社に所属したりする（例えば狂言方などと呼ばれる）など、呼称の違いとともに芸能ジャンルによって役割も異なる。また、制作会社に所属する場合もある。

組織に所属しているか否かは別として、舞台監督には総合力が求められることから、助手をつとめながら経験を積んで独立していく場合や、音響家や照明家など現場の経験を積んだ人材が舞台監督として活動するなど、いずれにしても現場の経験を積まざるには務まらない職能であるといえる。

このように概略では舞台監督の姿は捉えられても、一人一人の舞台監督がカバーする仕事の領域や方法論は、個人によって、また、現場によって、また芸術ジャンルによっても異なっているのが現状である。舞台監督が舞台創造にとって必要不可欠な存在でありながら、職務の多面性、多様性故にその明確な定義を行うことは困難である。

舞台監督の養成機関や講座は一部の大学に講座がある程度で、専門家としての育成機関はほとんどないと言ってよい。その職務の範囲、対象が広くかつ多岐にわたることから、舞台監督養成のカリキュラムを組むことが難しいこともその一因であると考えられる。